

JAMの主張

誰一人取り残されることのない 社会を構築しよう！

【機関紙JAM・2021年6月25日発行 第269号】

今、人類が抱えるさまざまな課題は2030年頃、限界に達すると最新の科学が警告を発しています。

資源の大量消費、人口爆発と食料問題、そして、気温が上昇し続ける温暖化。飽くなき人間の活動は、地球の運命を左右しはじめるところまで来ているのです。

国連は、2030年に向けた国際的な目標として、「SDGs（持続可能な開発目標）」を加盟193カ国の全会一致で採択（2015年）しました。

私たちが直面するグローバルな諸課題を解決し、地球上で暮らすすべての人間が生き続け、人類がさらなる発展を遂げるために実現を目指そうとするもので、具体的に17の目標を掲げています。

私が生まれた1960年代は、「昨日より今日は、今日より明日はきっと良くなる」と誰もが信じた高度経済成長の真ただ中の時代でした。しかし、半世紀が経過した今ではどうでしょうか。「いつまでこういう暮らしができるのかねえ」といった不安を口にする人々が、この社会を覆っています。

奇しくもSDGsが提唱された五年後、今世紀最大のパンデミックが中国からはじまりました。

グローバリズムの進展によって地球の隅々までが繋がった現在、新型コロナウイルスは瞬く間に拡がり、今や世界中で猛威をふるっています。

人類の歴史は感染症との闘いといわれるようにこれまでも「黒死病」や「ペスト」、「スペイン風邪」など、私たち人類はいくつかのパンデミックを乗り越え、そして生き残ってきました。

これから未来に向かって生きていく私たちが最も大切にしなければならないのは、「地球上の誰一人として取り残されることのない社会の構築」であり、SDGsはこのことを誓っているのです。そのためにも全人類は、一丸となって、パンデミックに打ち勝ち、「いのち」を未来に繋げていかなければなりません。

書記長 中井寛哉